

小ブルジョアの特質

小ブルジョアの戦い方

小ブルジョアのきわだった基本的な特徴は、ほかならぬブルジョア社会の諸手段によってブルジョア性とたたかう、という点にある。

第一巻『ナロードニキ主義の経済学的内容』P367

小ブルジョアの限界

小生産者（および彼らの思想的代表者）——彼らは資本主義をののしり、しかり、のろうことはできるが、この資本主義の地盤そのもの、その召使たちにたいする信頼、偉大なクリヴェンコ氏のいわゆる「闘争がなかったならもっとよかったろうに」というようなばら色の空想を、拒否する能力はもっていない——

注) その召使たち——「官僚」等のこと、クリヴェンコ——ナロードニキ派の政論家

第一巻『ナロードニキ主義の経済学的内容』P406

町人＝「小ブルジョア」の経済学的意味

私が「町人的」という表現をもちいたのは、言葉の日常の意味においてではなく、経済学的意味においてである。商品経済の制度のもとで経営をおこなっている小生産者——これが「小ブルジョア」Kleinburger あるいは、同じことであるが町人の概念を構成する簡単な標識である。

第一巻『ナロードニキ主義の経済学的内容』P426

分配の不均等性のうちに悪の根源をみいだす小ブルジョアジー

なぜ悪の根源は、ありとあらゆる場所で労働を貨幣の占有者に従属させている生産関係のうちに見いだされないので、これらの生産関係の**最近**の形態のなかにあのようにくっきりと現れている、分配の不均等性のうちにだけ見いだされるのか？

第一巻『ナロードニキ主義の経済学的内容』P531

経済学的ロマン主義者とマルクス主義者の「見地」の差

ごらんのように、差異は「見地」だけにある。……そうだ、「それだけ」である！資本主義にたいするロマン主義的審判者が他方の審判者と異なるところは、一般に、「見地」「だけ」に、一方が後方から審判するのに、他方は前方からし、一方が資本主義によって破壊される体制の見地から審判するのに、他方は資本主義によって作り出されるもの見地からすること「だけ」に、あるのである。注) 私がここで言っているのは、すでに見たように、資本主義の評価についてだけであって、その理解についてではない。この理解の点にかんしては、ロマン主義者は、古典学派の人たち以上には出ていない。

第二巻『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』P148

コメント 滅び行くものの立場か、労働者の立場か。

1897年3月執筆